

修士論文(要旨)

2010年1月

## 幼児期の家庭内の食行動と子どもの自尊感情の関連性

指導 山口創 准教授

副査 森和代 教授

副査 鈴木平 准教授

国際学研究科 人間科学専攻 健康心理学専修

208j5003

荒木みさこ

## 目次

### 第1章 問題

1.1 先行研究	p.1
1.1.1 初めに	
1.1.2 食育について	
1.1.3 食と健康	
1.1.4 心理学と食行動	
1.1.5 人物画検査法について	
1.2 目的・研究意義	p.10
1.3 仮説	p.10
1.4 研究の流れ	p.11

### 第2章 予備調査

2.1 目的	p.12
2.2 方法	p.12
2.3 結果	p.16

### 第3章 本調査

3.1 目的	p.19
3.2 方法	p.19
3.3 結果	p.26
3.4 考察	p.89

### 第4章 総合考察

### 第5章 要約

参考・引用文献	p.114
---------	-------

謝辞	p.118
----	-------

資料	p.120
----	-------

## 要旨

### <緒言>

昨今では特定検診が施策されたことから、メタボリックシンドロームが着目され、栄養指導といった食生活の見直しがクローズアップされている。平成 17 年に制定された「食育基本法」をはじめ、「食育」という言葉を耳にする事が多くなってきている。「食育」に関与している分野・対象は多岐にわたるが(河野, 2007), どの分野からみても「食」を通じた健全な心身を養うことを目的とされていることが示唆される。なかでも幼児期の食育が重要であるとし(足立, 2006), 乳幼児の食行動に関する研究はこれまでもされているが、栄養学的側面が重視され子どもの食行動の背景にある心身の関連性などを探求する視点は殆ど重視されていない(小松, 2001)。また、早川(2002)などは幼児期の食は保護者の影響を大きく受けると報告しており、岡本ら(1996)は食事を作る保護者は食に関してストレスが生じると報告している。幼児の食行動に保護者が深く関与していると共に、保護者の食に対するストレスは大きいと示唆される。長谷川ら(2004)の研究では、母親の育児不安・配慮が子どもの食問題に影響を与えていることが明らかになっているが、子育てストレスだけでなく、幅広く子どもを育てることをどのように捉えているか、といった観点からの研究はされていない。また、食行動と子どもの心の発達に関連性について検討をする必要があることが考えられる。

以上のことから、本研究の目的を幼稚園児の子どもがいる家庭内での食行動に関する問題の把握と食育を含めた食行動の尺度開発と、家庭内の食育が子どもの自尊感情・保護者のストレスや子育て観にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とした。

### <予備調査>

予備調査の目的は、面接による家庭内の食育の実態把握と家庭内の食育尺度の項目収集を目的とした。調査時期は 2009 年 6 月 29 日～7 月 16 日であり、調査対象者は、面接者と直接面識がない幼稚園児の食事を作っている保護者 6 名と幼稚園に勤務している保育士 1 名を機縁法にて抽出した。面接は全て研究者が行い、作成した面接ガイドラインと質問項目に沿って半構造化面接で行われた。

面接によって得られた情報を書き起こし、2 回の KJ 法により予備調査の段階では 3 カテゴリー、8 ラベル、58 項目に分類された。この 58 項目を使用し、本調査で幼児期の家庭内の食行動尺度の開発を行った。

### <本調査>

東京都内の幼稚園 5 園を対象とし、配布した調査用紙のうち回収できた 198 名の幼児と幼児の食事を作る保護者を対象者とした。保護者に使用した尺度は予備調査で得られた 58 項目、子育て観尺度、食事時の感情評定、ストレスに関する項目、経済状況に関する項目であった。幼児に使用した尺度は、食事時の感情評定、自画像を書く為の B4 の画用紙であった。自画像は Machover(1949)によると大きさが大きいほど自尊感情も高く、本研究では自画像の大きさから自尊感情をアセスメントした。以下、食育を中心に結果・考察した。

幼児期の家庭内の食行動尺度の開発について、予備調査でえら得た項目に対して探索的因子分析(最尤法, Promax 回転)を行った結果、最終的に「料理に対するネガティブ」(10 項目)、「家庭内の食育」(12 項目)、「子どもの食行動」(8 項目)の 3 因子が抽出された。信頼性について Cronbach`

sの $\alpha$ 係数は $\alpha = .75 \sim .85$ であり内的整合性が検証され、妥当性については内容的妥当性、構成概念妥当性が検証され、本尺度は信頼性妥当性の観点から十分に使用可能であることが示唆された。

幼児期の家庭内の食行動尺度・子育て観尺度・自画像の大きさを Pearson の積率相関係数を行った結果、子育て観と幼児期の家庭内の食行動尺度においていくつか相関関係であったが、子育て観尺度と自画像、幼児期の家庭内の食行動尺度と自画像については相関がなく、子育て観・家庭内の食行動と自尊感情は相関関係ではないことが示唆された。

ストレスの程度・経済状況・幼児期の家庭内の食行動尺度・子育て観尺度で Kendall の順位相関係数を行った。ストレスの程度と幼児期の家庭内の食行動尺度の相関は、育児に関するストレスが高いと料理に対するネガティブも高いことが示唆され、育児ストレスの一部に料理をすることが含まれている可能性が示唆され、年収が多く・経済的にゆとりがあるほど料理に対する負担が少なくなることが示唆された。これは、外的サポート(食材の宅配委託など)を利用したり、食材を買ってきて調理する内食よりも、惣菜などの出来合いのものを利用する中食や外で食事をとる外食を利用するなどして、料理をする機会が少ないので負担に感じない可能性があることが示唆された。

家庭内の食行動尺度の各因子を 3 群(平均 $\pm 1SD$ )に分けて分散分析をした結果、料理に対するネガティブ・子どもの食行動の違いでは自画像の大きさに有意差はなく、家庭内の食育の違いのみ有意差があった。食育を実施している者は、中程度実施している者やあまり実施していないものに比べ、優位に自尊感情が高い事が示唆された。この結果は仮説通りであった。

家庭内の食育 3 群(平均 $\pm 1SD$ )に分けて Kuruskal-Wallis 検定を行ったところ、収入と家庭の総体的状況に優位さがあり、食育を多く実施している者は、年収が多く家庭を総体的に見てゆとりがあることが示唆された。予備調査の面接において、収入が多いほど食育を実践していると述べている方がいたことから、ある程度予想通りであった。

料理に対するネガティブを従属変数にした重回帰分析において、料理を否定的に捉えてしまうのは、食事を作るストレスを強く感じ、周囲とのかかわりが希薄であり、食育を実行していないことが関連していた。料理に対するネガティブは食育とも関連があり、ネガティブな悪循環を示唆させる結果であった。家庭内の食育を従属変数にした重回帰分析において、食育を実施していると、保護者も子育てや料理に対してポジティブであり、子どもも自尊感情が高くなる事が考えられ、食育は保護者と子どもの両方に良い影響を与えることが考えられた。子どもの食行動を従属変数にした重回帰分析において、食育が子どもの食行動に影響を与えていることは解釈できたが、育児の中で食に関するストレスが占める割合と収入状況に関しては解釈不能であった。

自画像の大きさと家庭内の食育において 2 次相関の関連性が見られた。この結果から、食育を実行していない時とある程度実行している時では自尊感情が低くなったり変化がみられなく、ある一定の水準以上の食育を実施していると自尊感情が高くなっていく関係性であることが示唆された。つまり、食育を中途半端に実行してしまうと、自尊感情が低くなる関係にあり、食育を実施する際はある水準以上実施しないと自尊感情が高くないということが示唆された。

家庭内の食行動・子育て観と自尊感情・ストレス・経済状況において一部関係性が明らかになったが、今後更なる研究が必要であると考えられた。

## 主要文献

- 足立巳幸 (2005). 食育に期待されること 栄養学雑誌, 63, 201-212.
- 秋田地域振興局 (2003). 幼児期の食育推進事業—アンケート調査結果— 日本能率協会総合研究所 (2006). 子どもの食生活データ総覧 2006 生活情報センター, 145
- 陳東・森恵美・望月良美・柏原英子・安藤みか・大月恵理子 (2006). 乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発—信頼性・妥当性の検討— 千葉看護学会会誌, 12, 76-82.
- Delatte, J. G., Hendrickson, N. J. (1982). Human Figure drawing size as a measure of self-esteem Journal of personality Assessment, 46, 603-606.
- 長谷川智子 今田純雄 (2004). 幼児の食行動の問題と母子関係についての因果モデルの検討 日本小児保健協会, 63, 626-634.
- 早川淳 (2002). 母子相談の事例から 畠中宗一(編) 母子臨床再考 現代のエスプリ 至文堂 420 81-92
- 今田純雄 (1997). 食行動の心理学 培風館
- 小林重雄 前川久男 (1993). グッドイナフ DAM(draw-a-man)検査—人物画知能検査— 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 75-83.
- 小林重雄 (1996). グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック 三京房
- 小松啓子 (2001). 子どもの生きる力を育てる連続的な食生活体験の意義 —幼児期の食行動の自立をとおして— 日本生活体験学習学会誌, 創刊号, 19-27.
- Machovar, K (1949). Personality Projection in the Drawing of the Human Figure, Charles C Thomas.
- 松本金寿 (1954). 児童の心理 日本応用心理学会(編) 中山書店.
- 内閣府食育推進ホームページ (2007). <http://www8.cao.go.jp/syokuiku/index.html>
- 中嶋義明 今田純雄 (1996). たべる—食行動の心理学— 朝倉書店
- 日本能率協会総合研究所(編集) (2006). 子どもの食生活データ総覧 2006 年版 生活情報センター
- 岡本洋子 田口田鶴子 (1996). こども期の食事がその後の味覚感受性や性格特性に及ぼす影響 日本家政学会誌, 48, 621-631.
- 大谷貴美子(編) (2008). よくわかる小児栄養 ミネルヴァ書房
- 桜井茂男 (1984). 幼児における人物画の大きさと有能間及び体格の関係—枠づけ法を用いて— 教育心理学研究, 33, 217-222.
- 桜井茂男 (1988). 幼児における有能間と人物画の大きさととの関係—枠づけ法を用いて— 教育心理学研究, 36, 63-66.
- Swensen, C. H. (1968). Empirical evaluations of human figure drawings Psychological Bulletin, 70, 20-44.
- 浦上純子 堤麗 岡本美智子 (1998). 幼児食—考察 : 親の視点から考える 日本保育学会大会 研究論文集, 51, 468-469.